
マウル

円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マワル

【Nコード】

N9436A

【作者名】

円

【あらすじ】

ぼくの双子の妹はもう死んだ。でも引越した先でその妹とよく似た少女に出会う。少女はほのかに緑色の瞳をしていた…。

【0・】

いつからだろう。

ちゃんと歩いてきたはずなのに。まっすぐ歩いてきたはずなのに。

浮かれて、調子に乗って、後ろを振り返ってみると今まで来た道が見えないんだ。

まっすぐ歩いてたら、入ってきたドアだって見えるはずなのに。何も見えない。

やり直そうと、引き返そうと思っても、

足にはいくつものクサリががんに取り巻いていて動けない。

暗くって、怖くって、それからずっと、

何かに追われるように、逃げてくるように今まで生きてきて。

いつの間にか、いつか見たような場所に戻ってるんだ。

隣には、さっき出てきたはずのドアがあったんだ。

ふと、手を見るといろんなものがすり抜けていったんだ。

そこで思った。もう無理なんだ。どうやってもだめなんだ。って

さ。

あいつは言った。

ぼくにではなく、

自分に言い聞かせるように、

思い知らせるように、

本当に無表情で。

いつものアノ笑顔を見ているからこそ、

それを直視するのはつらかった。

でもそれよりあいつはそのあとに何かを言うつもりだったと思う。

言いたそうだった。

でもそのときには全くわからなかった。

わかるはずもない。

でも

今ならわかるだろうか。

すべてが終わり、

また始まるうとしている今なら。

【1. 引越し】

「近くに小学校があつてね。あ、でも純平が通うところはそこじゃないんだけどね。それで目の前にでっかいお家があつてさ。会ったらちゃんと挨拶してね。じゃあそんくらいかな……。あとはもう5年生なんだから自分でわかるわよね。あ、ほら着いた着いた。」

うとうとしていたところに車が止まった衝撃が伝わる。まだ眠い頭を無理矢理起こす。

「え、何？もしかして寝てた？じゃあさっきの聞いてなかった？？」

「……んー」

「……うー。まあみればわかるからいつか。ほら。着いたよ。」

「ここ？」

「うん。いいところでしょ。なんか。」

「なんかって……。」

あたりを見回す。光がまぶしい。

「おーい。早くー。ちょっとこっち手伝えよ。」

「うん。今行くからー。はい、これ持つて。あ、これも持てるね。」

荷物を持たされ向かった先はぼくがこれから住む家。日当たりがいいのか日差しが熱い。暑いというよりも。ドアに手をかけると熱くなっている。

「これ、真夏きついな……。」

中に入ると新しい木のおいがしている。人のおいがしない。

「ああー疲れたあ…。いいね新築。今日からここに住むのかあ…。」

小5になる春。ぼくはこの町に引越してきた。引越なんて初めてだったけど案外あっさり終わった。ぼくにしてみれば。でもぼくにはもつと大変なものが待っている。新しい小学校。新しい世界。異次元空間。…言い過ぎか。

「はあ…。」

先行き見えず思わずため息。まあ、転校なんてそうあることじゃないからこういう経験もいつか…。などとは冗談じゃないが思えない。近所の人にだって会いたくないくらいなのに。

「ちょっとそこらへんブラブラしてくるから。」

「あら、そう。気をつけてね。」

ドアを開けるとまぶしい光が差し込んでくる。暑い。さすが南向き。

「「あつっ——……。」「」

思わず独り言。いや、独りじゃない…。声が重なっている。

「「……ん???」「」

左を見る……。眠そうにこっちを見ている。明らかに寝起き。上下スウェット。明らかに寝巻き。爆発頭。明らかに寝起き。注意、ただ今、午後3時……。あ、そっか。今起きたばっかか。そっかそっか…。って3時?!

「…………う…うわわああああ！？」

その寝起きの少女はバタバタとポストから新聞をあわてて取り出しバタバタと家に入っていた。…………。なんだったんだろう。今の眠り姫とか？まあ…いいか。ん、いいのか？…まあいいや。

あの眠り姫は5、6年でほんとに年くらいか。だとしてもここに住んでいるんだったら、その小学校に通うのだろう。でも、もう会うことが無いなんて言い切れない。ご近所さんだから…。お隣さんだから…。そんなことを考えながら家の周りを一周する。家に戻る。特に変わったことはない。いや変わったことといえばあの少女との出会いか。いや、出会いというより鉢合わせのような。

そんな不意打ちのような彼女との出会いは、この物語の始まりだったのか。いかにも彼女らし

いというか。今となってはその出会いがぼくを大きく変えていったのだろう。

【2・お隣】

暗い。

暗い。

暗い。

とにかく暗い。

足の下は水がはってある。

何度も転ぶ。

痛い。

びちゃびちゃと気持ち悪い。

どこかへ向かっているけどわからない。

何かから逃げているのかもしれない。

あるいは何かを追いかけているのかもしれない。

そのうち、

むこうの方に光が見えて、

うれしくなってそこに向かうと、

明るすぎる光が目に入ってくる。

明るすぎて目をふさぐ。

手はさっきの水でぬれている。

顔が濡れる。

気持ち悪い。

かすかに開けた目に映ったのは自分の手だった。

でも。

その手はなぜか真っ赤だった。

血のような、

赤黒い色。

いつの間にか完全に開いていた目は辺りを見回す。

真っ白な空間。

真っ赤な手。

きれいな白に赤い自分。

誰もいない。

それでも自分は真っ赤だった。

真っ赤だった。

「…ん…。……………夢…」

自分に言い聞かせる。あるはずないことだけど、リアルな夢だった。でもそんな憂鬱な気分を打ち壊すような現実が目飛び込んでくる。

時計。

8時15分。

今日は新しい学校生活初日。

「……………あ。」

初日から遅刻。駄目だ。転校生失格だ。というかなにをすれば合格なんだろう。いやそんなこと考えてるひまはない。それでも時間は過ぎていくから。

「ねえねえ今日から転校生来るらしいってさー!」

あ、そればくです…。

「うつそー!女かな??それとも男??」

「いや、それがまだわかんなくて…。てか8時までに来てなくちゃいけないのに、ついさっききたらしいよ。」

「えー。転校生の癖に初日から遅刻かよ…。」

やっぱり言われるか…。というかこの状況だと盗み聞きしてるみたいで気分悪いんだけど。

教室の前。ひとつ壁の向こう。女の子たちがしゃべってる。そのとき鐘が鳴った。

「はい。静かにー席ついてー。この様子だともう知ってると思うけど、今日はこの学校に新しく入った生徒がいます。はい、入ってきて。」

先生に呼ばれ、一呼吸おいてから足を動かす。教室がざわつく。

ドアを開ける。教室に入る。たくさんの顔。こっちをまじまじと見ている生徒や、近くの人としゃべっているのや、朝っぱらから寝ている生徒さえもいる。そういえばこの前に会ったお隣さんもよく寝る子なんだろうなと、先生はいつもこんな気分だったのかとも思いつつ。

「じゃあかるーく自己紹介しちゃって。」

じゃあ本当にかるーく。

「えーっと…秋元純平です。どうも。」

「ねーどっからきたの??」

「遠くから…。」

「趣味とかは?」

「特に…。」

「…。」

「……。」

嫌な沈黙。

「…ごめんなさい……。」

なんか謝っちゃったよ。

「…。はい、じゃあ仲良くしてやれよ。」

先生もちよっと困っている。

「じゃあお前の席は…あの爆睡してるやつ隣の隣でいいか?」

「……はい。」

ヤダって言ったらどうなんだろうね。

ぼくが席に座ろうと歩き出したとき、『爆睡してるやつ』がいきなり、がばつと体を起こす。そしてそのまま立ち上がり手を上げ先生に向かって大きな声で、眠そうな顔で言う。

「先生っ！！保健室行つて寝てていい?？」

「駄目に決まってるでしょ！！はい、じゃあ次の時間の準備して。」

そのときぼくと今起きた彼女と目が合う。

「アレ??そういえば…」

「「あ——っ!!」「」

『爆睡してるやつ』はぼくのお隣さんだった。

それはむしろ因縁のような出会い。

眠り姫はどこでも寝ているそうです。

【3・遅刻】

ぼくには双子の妹がいる。正しく言えば……いた。ぼくが小学2年生の時、家に強盗が入った。それだけでも驚きなのにその強盗は一番近かった妹を、まだ静かに眠っていた妹を、連れて行った。びつくりびつくり。身代金目的かと思いきや、妹がひどく暴れたせいだろう、途中で殺されていた。

妹はおしとやかとは言えないほうだった。いつもふざけて、いつもはしゃいで、はつきり言っただけには少し厄介な存在だった。それでも、嫌いなわけではなかった。

犯人はすぐに見つかった。しかし少し複雑。犯人にはぼくと同じくらいの子供とそのほかに息子が二人いて、でも離婚して妻のほうに子供は預けられたそう。でもその妻は少し前に失踪したらしく、子供達だけで生活している。生活費などはわずかながら親戚から振り込まれているらしい。

刑事さんはひたすらぼくを慰めてくれた。まだ小さかったぼくに気を使っていてくれたのだらう。でもそのころのぼくは何がおきたのかわからず、ただ目の前で起きた事実を整理しようとしていた。できるわけが無いけど。

そしてこの引越しはやつと理解したぼくに、親が、気分転換でもと気を使ってくれているからこそのものである。そんな金があるかもわからない。余裕もないかも知れない。ぼくが理解なんかしてないかも知れないのに。

得意技は現実逃避だから。笑い事じゃないけど笑いたくもなる。あきれてくる。

でもつい最近、何かが変わったような気がする。何か、一度味わっ

たことのある懐かしい感覚。

……由夏……??

「いっやー!! ホント悪いねえ。こんな朝っぱらから起こしてもらうとかうれしいかぎりだよ。うんうん。これでもう一生遅刻はなしだね。もっと早くからこっち来てればよかったのにー。そしたらうちがあんなに何回も遅刻したりはないんだよね? わかるよね?」

「…うん。わかるんだけどさ。いや、わかんないけど、まずお前がしなきゃいけないことはさ、時計を見ながらどれだけ時間と戦えるかなんだよね。それにまだお前、スウェットだし…。」

「…………。わかったよ…わかったともさ!! イイもんそんな急がなくても…」

「じゃあお前は急がずに10分でたくしてそのまま学校に着ける自信があるの?」

「………… あ…あるもん!!…」

「言ったね! じゃあもう先行くからね。」

「あ——お願い待って今すぐ準備するから待ってー!!」

何でこんなことになってるんだろう。

回想すると…

『『あ——』』

『何でここいんの?』

『なんかわかんないけど、この学校なんだよね。』

『へえ。なんか面白いねー。』

『いや全然面白くないけど…。』

『でもよかったね。心強い味方がいてー。ねー。転校とか不安ですよ。誰も知ってる人いないとか絶対うち無理だなあ…孤独孤独ろんりいがあるになっちゃうよお。』

『心強い味方？え、どこにいの？』

『いるじゃんかよお！！こ・こ・に！！』

『どこが？？』

『どこって…。…雰囲気雰囲気！雰囲気そつぱいでしょ！！』

『いや全く』

『う…。ま、ともかくさあ、こんな偶然あることじゃないしさあ…。うん！ハイ！決定！っていうことで明日からうちん家来て起こしに来てね！！』

『ヤダ。』

『じゃ早速明日からね。時間はけっこう早めにしようね。うーん8時くらいにうち家ピンポンしてねー。』

『…。』

……。

うまくはめられた。いや、行かないという手もあったけど、なぜかそつする気は無かった。なぜか…。ぼくはもうなんだかわかってるはずだけど。

「はいッ！！お待たせー。早く行こうぜ。遅れちゃうよー。」

「いやお前のせいだから…。」

「ん？なんか言った？」

「いいえ…何も言ってますん。」

「うん。よろしい。じゃあ早速走るぞー！！おー！！」

「何盛り上がったんの。」

「いいじゃん。ていうか。早くしないと真面目に遅れちゃうよ？」

「今何分？」

「22分。」

「え……」

二日連続遅刻なんて……。しかも二日目の学校なのに……。

「あー。疲れたー。よかったねー。間に合ってー。」

「なんでこんなになっっているかって説明すれば、お前の名前以外出て来ないと思うよ……。」

「……。あ、あんなところに石ころが……。」

「逃げるな……！」

なぜか一緒に学校に行くことになってしまっ、ついでに遅刻しそうになって。ぼくがいるのに何で遅刻するのかわかんないから、あいつの行動が遅いのだ。ただそれだけのこと。

「そっいえばだけど。なんかまだ誰が誰だかわかんないから、教えてくれない？」

「えー。めーんーどーくーさーいー。なーんて言わないから安心しな。」

「……。ありがと。」

教室に入る。みんな話していたり、じゃれあったりしていてぼくらの存在には気付いていない。席に座る。一番角の席なのであたりを見回すのにはちょうどいい席だ。

「じゃあ早速…。転校生に、他人紹介！！いえーい！！わーい！！パチパチ！！」

「…いいから早くして。」

「もう。こういうのは盛り上げが肝心なのに。まあいいや。純平に言ってもわかってくれないもん。」

「わかるかよ。…って待って。今なんて言った？」

違和感を覚えて聞き返す。

「え？こういうのは盛り上げが肝心なのに。？」

「その後。」

「まあいいや。？」

「その後。」

「純平に言ってもわかってくれないもん。って。」

「純平って…。」

「え…。ダメ？」

「いやいいんだけど。」

「じゃあいいじゃん。」

いいんだけど。いいのだけでも。こういうのは慣れてないというか。同年代の女の子に下の名前を呼ばれたのは初めてだったりしちゃったり…。というか同年代の女の子と話す機会が無かったりしたのだ。

妹がいたころは、学校に行くときも帰るときも妹と一緒にだった。ほとんど遊びに行くことも無く、妹と一緒に家の中で遊んでいた。それに妹が死んでからは引きこもりのような状態で学校に行って遊んだりするどころではなかった。

それでもあいつと話せているのは、あいつが妹に、由夏に似ているからだと思う。

「あ、うちのことは要って読べよっ！！」

初めてかもしれない。正面からまっすぐに彼女の顔を見た。ぼくはあまり人と目を合わせることは無い。なんか怖いから。でも、吸い込まれるように見つめた彼女の瞳は、少しだけ緑色をしているように見えた。

「何々？見つめちゃって。もしかして惚れちゃった？」

「冗談じゃねえ」

「照れんな照れんなってー」

その瞳はどこかで見たような気がしたがあまりよく覚えていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436a/>

マワル

2010年10月17日05時03分発行